

## 再生

2011年3月11日14時46分発生 of 東日本大震災から早14年、幾度の春が巡ってもその季節になると思い出す。私たちは21名の船釣クラブを組織して年間季節ごとに様々な魚種を求めて日本海や太平洋へと繰り出していた。中には漁師かともごうばかりの常勤猛者もいた。その時はやってきた。私は山形市の文翔館で30人ばかりの会議中だった、ビシビシというレンガの軋む音と共に会議メンバーは皆蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。私も交差点の信号が消える中を自宅に逃げ帰り、TV画像で海の惨劇を目の当たりにした。三陸女川、亶理荒浜、相馬港、想像を絶する海の驚異だった。

潮干狩りや海産物で観光地としても名高い松川浦の相馬大橋は10mを超える津波に飲まれ、釣行のたびに親しく出入りしていた船宿や食堂は、いつも楽しく友や兄のように接してくれた船長は、どうなってしまったのか。その日の電話は繋がらなかった。

1週間後によく電話がつながり船長の声を聞くことができた。その時船はちょうど港の出入り口にいて、湾内に戻ったが地震の大きさに気づいた船長はその後に来るであろう津波を考えて、船の舳先を沖へと向けた。湾を出る頃には沖を走ってくる大きな黒い壁が見えたと言う。船長はその見上げるばかりの黒い壁にまっしぐらに突っ込んで行った、ズシンという強い振動とスクリュウが空回りする音が鳴り響き船はまるで宙に浮いたようだった。漁船や釣船は横波を受ければひとたまりもない。恐怖を乗り越え常に波に対して垂直に立て続けた船は沖の平場に逃れることができた。波に飲まれて沈んだり、港に逃げ帰って転覆した船の多い中、プロとしてのこの冷静で勇氣ある判断こそ、我々釣り人が命を預ける所以である。

「船長、命が助かって良かったな、俺ら何か救援物資を送るか？」その間に船長はまだ何から考えていいかわからないからと言ったあとに、「俺らは海で長いこと生きてきた、あんた達とも知り合って釣船で生きてきた。これからだってやり続けるしかないんだ」、「落ち着いたらきっと釣舟は再開できると思うから、乗りに来てくれ、お客さんを連れてきてくれ」、そう言った。その後、福島原発の被害もあり3年間の禁漁が続いたが、各地の漁港からポツポツと出船の情報が聞こえるようになり、久しぶりに船長から電話があった。

放射能の調査を兼ねた釣船を出すとのこと、早速数名の有志を募り乗船した。公的に様々な検査や数値をクリアした後の太平洋の釣りを存分に堪能したのは言うまでもないが、その有様がまるで釣り堀だった、ほぼ入れ喰いなのだ。三年の禁漁がこれ程、魚達を増やすものか、海の豊かさと自然のエネルギーの偉大さを感じると同時に、人間の罪深さとその行為による搾取の凄まじさをしみじみと実感した。

しばらくして繊維の組合に声掛けしヒラメ船釣会を開催した。放射能の風評被害もあったが、初めて釣りをした組合事務局のおばちゃんが4枚も釣り上げ久しぶりに船長の笑顔を見ることができた。社会はそれぞれの職業に携わる人々がいて、その相互関連の中で成り立っている。自分だけ我が業界だけが良ければそれ

で良しとはできない。自らの生業によってその関係者に奉仕することはもとより、他の様々な職業や人々に奉仕できることも又、ひとつの喜びである。

ちなみに、我釣クラブの中には船釣りがほぼ職業と言っても良い比重の人々が多くいる。